OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	御所ことばについて
Author(s)	堀井, 令以知
Citation	懐徳. 1983, 52, p. 54-64
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90614
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

御所ことばについて

堀井令以知

一　御所ことばの発生

宮中では、「豆腐」をオカベ、「鯉」をコモジのように、御所ことばが用いられてきたことは一般にも知られている。

御所ことばは、内裏や仙洞御所において、宮中女官が用いはじめた奥向きの女官どうしの話しことばである。御所ことばの最古の文献で、御所方の記録としては、恵命院権僧正宣守の『蜑藻屑』（あまのもくず）がある。この書には、応永二七年（一四二〇）ごろのお局生活で使用された御所ことばが記されている。陽明文庫本によると次のようである。

「内裏仙洞ニハ一切食物異名ヲ付テ被召事アリ一向不存知者当座ニ令迷惑者也　飯ヲ供御　酒ハ九献　餅ハカチン　味噌ハムシ　塩ハシロモノ　豆腐ハカベ　索麺ハホソモノ　松茸ハマツ　鯉ハコモシ　鮒ハフモシ　ツグミハツモシ　ツクミハ供御ニハ不備也　ツク〳〵シハツク蕨ハハラ　ヒトモシハウツホ　如比異名ヲ被付　近比ハ将軍家ニモ女房達ハ皆異名ヲ申云々　御菜ヲハメクリト云　常ニヲマワリト云ハワロシ　椙原ヲハスイハ　引合ヲハヒキト申也」

このように、飯をクゴ、酒をクコン、餅をカチン、味噌をムシといったことは、当時の一般社会とは異なる語として注目されたものである。御所ことばが宮中だけでなく、十五世紀のはじめには、足利将軍家においても用いられたことは、『蜑藻屑』に、「近比ハ将軍家ニモ女房達ハ皆異名ヲ申云々」とあるのをみても明らかである。武家方の御所ことばとしては、足利義政時代の『大

上臈御名之事』に、はじめて女房ことばという術語が用いられ、魚をオマナ、鯛をオヒラ、鯉をコモジ、かまぼこをオイタ、蛤をオハマ、小豆をアカ（アカ〳〵）のような語が記載されている。本書は、著者・年代の明記はないが「慈照院御代」の大上臈の名・深曽木・化粧・服飾・おさな名・女房詞などを記したもので、御所ことば約一二六語を掲げてある。

御所ことば発生の時期について、八代将軍徳川吉宗の次子田安宗武は『草むすび』の中で「明徳応永などいふらんほどにや初まりけん」として、『蜑藻屑』より約三十年以前にさかのぼるとしている。

十五世紀のはじめごろに、どのような理由で隠語的婉曲的性格をもつ御所ことばが、はじめは食物の異名として多く用いられ、文献にも登録されるようになったのであろうか。少なくともその一つの理由は、南北朝時代から公家階級と庶民階級との接触が多くなり、上下の階級の生活交流、特に庶民の口にする飲食物が貴族階級の食膳にも供せられるようになり、貴族たちは庶民の用いる飲食物名を直接じかにいうことをはしたないと考え、その名を避けて、異名で飲食物を呼ぶことが多くなったのではなかろうか。宮中に奉仕する女房たちのあいだで、異名がしだいに固定的となり、御所ことばを形成していったものであろう。御所ことばは本来、女房の日常生活に根ざした話しことばであり、お局の生活、奥向きの生活の中での言語使用である。

二　御所ことばの拡大

『蜑藻屑』（十八語所掲）にみられるように、当初は語彙数も少なかった御所ことばが、時代を降ると、しだいに語数も使用範囲も広がっていく。御所ことばの使用階層も宮廷や尼門跡だけに限られなくなった。公家社会から町方へ広まり、一方、将軍家の大奥、さらに大名・武家へ、武家から町方へと広まった。語彙の範囲も、飲食物中心の異名から、衣・住その他の関係語に拡大し、江戸時代における女中ことば系の諸書に登録されるようになる。江戸中期に出版された『女重宝記』（約一四四語）には、「御所方の詞づかひなれ共地下に用事多し」と記されているように、元禄ごろはすでに御所ことばは地下階級にも用いられていたことがわかる。さらに、御所ことばが町方へ広まった事情は、『女中言葉』『女中詞』『女言葉』『女諸礼綾錦』などの語彙集や婦人教養書中にも歌語や雅語とともに御所ことばが収められてい

ることから、町方の婦人語の中に普及した姿をみることができる。一方、御所ことばが「お屋敷ことば」として武家方の女中に用いられるようになったことは、式亭三馬の『浮世風呂』（文化九年・一八一二）にも次のように記されている。

おさめ「ヲヤ〳〵、おしやもじとは杓子の事でございますよ。ヲホ、、、、むす「おさめさん。ほんにかへ。私は又おしやべりの事かと思ひました。鮓をすもじ。肴をさもじとお云ひだから、おしやべりもおしやもじでよいがネエ　初「いかな事てもおまへさん。ヲホ、、、おさめ「やがてお屋敷へお上りだとわかりますのさ　初「さやうさネエ。おしつけ御奉公にお上り遊ばすと、夫こそ最も大和詞でお人格におなり遊ばすだ。…（三編巻之下　岩波日本古典文学大系本）

このように江戸時代には、御所ことばは、女房ことば、女中ことば、大和言葉の名の下に、女性の教養やしつけを説く書物に収められ、しだいに位相語として広まっていった。十七世紀後半（寛文～元禄）のころには、女中ことばは、良家の子女の用いる女性語として発展しつつあった。上方文化の東漸に伴い、御所ことばも東国におよび、『浮世風呂』にみられるように、江戸時代の中期から後期には、さらに民間にも広く用いられるようになっていった。

三　『お湯殿の上の日記』と御所ことば

御所ことばの宝庫ともいえる『お湯殿の上の日記』は、宮中の奥向きの公的日記である。主として禁中お湯殿の上の間に奉仕する女房が交替で記したものである。天皇の御動静を中心に、儀式、献上物、事件などを記述し、応仁の大乱後、文明九年から江戸時代末期まで正本あるいは写本で伝わり、刊本も貞享四年度まで出版されている。

お湯殿の上の間は、土御門里内裏が営まれたとき、常御殿、議定所の隣に位置し、お上のお湯殿の辺にあった。ここは高級女官の詰所となり、典侍・内侍など近侍の女官が奉仕していた。この日記は、それらの女官が主として交替で当番として記していったものである。もっとも、天皇がこの日記をお書きになった箇処もある。元亀三年正月三ケ日は正親町天皇の御宸筆である。時代のちがい、日によって当番の執筆者の微妙な筆ぐせ、表現差がみられるものの、公的日記の性格は一貫して変らない。この日記は、女性の仮名の日記であり、漢字使用が

少なく、正本には濁点や句読点はない。難解な箇処があるが、国語史的にみて、きわめて貴重な日記であり、御所ことばの時代的推移を知る上にも必見の文献といえる。

四　文字ことば

御所ことば語彙の中には、接尾語「もじ（文字）」による構成が多い。飲食物に関する語で、「おすもじ（すし）」、「いもじ（いか）」、「くもじ（茎漬）」、「さもじ（さば）」、「たもじ（たこ）」などがあり、その他、「おもじ（帯）」、「のもじ（糊）」などがある。

『お湯殿の上の日記』には多くの文字ことばが用いられている。その中には、一回限りと思われる使用もある。「くもじ」は、この日記では少なくとも七通りの意味が見出される。

㈠　酒の意味。「つねの御所の御庭のしなの（信濃桜）さかりにて。女房たち。ばんしゆ（番衆）などにくもじたぶ。」（文明十七年三月十日）

㈡　盃事の意味。「はなさかりにて。おもしろく。御ひし〳〵。くもじなどありて。御さか月あまたまいる。」（文明九年二月七日）

㈢　茎漬の意味。「うぢのほうをん院よりくもじ二を

け。むめ一をけまいる。」（文明十四年正月九日）

㈣　還御の意味。「女ゐんの御所このほどかり殿にならしまし候て。けふくもじなる。」（慶長八年二月十九日）

このほかの「くもじ」は、一回限りの使用であって、辞書にも登録されることはなかった。これらは文脈によって理解できる。

㈤　公事の意味。「ながはしと。たかくらどのくじの事。四辻大納言。くわんしゆ寺中納言に松木中将。権佐して一日の御くもじ事おほせきかせらるゝ。」（永禄三年五月八日）

㈥　首級の意味。「夕がたさかもとのぶけへ木沢がくもじのぼりて。人〳〵みるよしさたあり。」（天文十一年三月十六日）

㈦　栗の意味。「ながはしよりくもじのかもじこしらへてまいる。」（天正十七年八月二十一日）この箇処の「くもじ」が栗で、「かもじ」が「かちん（餅）」、従って、「くもじのかもじ」は「くりのかちん（栗餅）」であることは、「ながはしよりくりのかちんこしらへてまいる。」（同年八月十八日）の記事からわかる。

これらの「くもじ」のうち、酒を意味する「くもじ」

の使用には時代差が認められる。酒の御所ことばとしては、室町時代に多く用いられた「くこん（九献）」は、慶長以後はまれとなり、「くもじ」が多用される。慶長八年度では、「女御の御かたよりくもじまいる。」（正月四日）のように「くもじ」を用い、「くこん」の使用はまれである。このように、「くもじ」と「くこん」の使用について時代差がうかがえる。文字ことばについて、『日本国語大辞典』が、この日記を引用して誤った解釈をしている語がある。庚申の記事で「あもじ」を「姉」の文字ことばとして「あもじ御所もいらせおはします」（文明十四年六月二十三日）を引用しているのは誤りで、この箇処の「あもじ御所」は安禅寺宮観心女王のことである。また、「いしいし」を「団子（だんご）」の意味にとって「あしたの御いわゐ。御こわく御御いしいし昨日におなじ。」（文明十年正月二日）を引用しているのも誤りで、この日記での「いしいし」は「一々、次々に」の意味で用いられている。

五　御所ことばの発掘

『日本国語大辞典』は、その登録されている語彙数については、従来のどの辞書よりも多いが、この辞典に記載されていない京都御所のことばがある。たとえば、御所で使用された未献を意味する「ひつじ」は未登録である。丑献の「うし」も、この日記からの誤った引用がみられる。文明九年正月十四日の「ぐわんさんの御こわく御いつものごとし。けふの御うしのかちん上らふよりまいる。」の「うし」を「牛皮飴」の異称と誤解し、文明十九年正月十二日の「御うし。うぢのちをん院（ほう）よりくもじ二おけ」を引用し、「うしを丑の刻、丑の時」の意味に誤解している。

柳田国男によると、誰も退屈してよく読もうとしない『お湯殿の上の日記』は、日本の文章の一つの見本だという。そして「日常の又平易な、女性の文章」だともいう（「鴫と哉」）

この日記で用いられる「私」は、室町時代には少なくとも人称代名詞ではなかった。未だ名詞として使用され、その意味は公にたいする私、天子の近侍の人たち、女房を示していた。「くごの御なかに御てうしまいりて。わたくしどもゝのみまいらする。」（文明十四年五月九日）「わたくし」に「御」を付けることもあった。「くばう。御わたくしことなる御事も御入候はでめでたし。」（天文三年うるう正月二十八日）「きざわいなか五か。

三色。御わたくしまでとてしん上する。」（天文八年三月六日）また、この日記と同じ形式で記された宝鏡寺日記万治三年六月十八日にも、「きん中様へほしうり御あげ候　御わたくしへもつかはされ候　いづれも長に有」のように「御わたくし」が用いられている。この語は宮中の女房をさすものと考えられる。

六　「御」の着脱

「御」を付けるか付けないかは、時代により環境によって差があるが、この日記では、「鮎」については、室町時代ではほとんど「御あゆ」のように「御」が付いている。「むろまち殿より御あゆ一をしきまいる。」（文明九年三月二十九日）これが、寛永二年の日記（五月一日、六日）では、「あゆ」のように「御」を付けなくなっている。敬体の差のほかに時代差というべきであろうか。

「御」はこの日記では名詞以外にも自由に付いた。「あか事（火事）御ちか〳〵とて。」（文明九年正月二十九日）「御ひし〳〵」（同年正月三十日）「御うれしがりて」（同年四月二十一日）「御にぎ〳〵也。」（延宝七年五月七日）「御ちと」のようにもいう。「きたこうぢどのへ久しく御まいりなきとて。御庭のはなもおもしろくさき。御ちと御まいり候て。御らんじられ候とて。よびまいらるゝ。」（文明九年二月二十八日）

この日記では、複合語に「御」を付けるとき、複合要素間に「御」を挿入する例がある。「きよ御はらゐ（ひい）」（文明十四年八月三日、明応六年四月一日、天文五年九月一日など）のように、「清」と「祓」のあいだに「御」を入れる。「御きよはらい」とはならない。「しろうり」は「御しろうり」でなくて「しろ御うり」（明応六年五月十六日）となる。このほか、「しろ御たち」（文明十四年八月七日）「御しろ御たち」（文明十二年八月一日）「しろ御まな」（明応六年二月七日）「くろ御いた（岩塩か）」（文明十三年六月八日）、「さか御ひら（酒漬の鯛）」（文明十三年六月十日）、「くさ御つけ（ねぎのみそ汁）」（文明九年三月四日）、「あか御まな（鮭）」（享禄五年九月六日）がある。「くさおつけ」「あかおまな」は熟合度が強い。

七　御所ことばと尼門跡

明治維新以前の京都御所のように、御所ことばによる言語生活を送っている社会をあえて現代に求めるとすれ

ば、京都にあっては、われわれの調査研究した尼門跡を挙げることができるであろう。

尼門跡は、もと比丘尼御所、黒御所、女王御所ともいい、明治維新以前は皇女、王女または皇室の猶子であられる女子が住持されていた御宮室系の尼門跡と、公卿の女や摂政関白家の猶子となった女子の住持された御禅室系の尼門跡とがあった。このうち、御宮室系の尼門跡は皇室との関係が密接であったから、当然、御所ことばの生活が宮廷と同じように行われていたのである。中でも、京都御所の北西に近く位置する大聖寺門跡は、われわれの調査によって御所ことばの保存率が最も高い由緒寺院であることが実証された。

大聖寺は足利義満が建立した臨済宗の尼門跡である。応永二六年（一四一九）、北朝の後円融天皇の皇女が入室されてから比丘尼御所となった。後柏原天皇の第一皇女、古鑑光院覚鎮宮が入室されてからは、歴代天皇の第一皇女が入室されることが多く、宮廷に威勢を持ち、江戸初期からは尼衆の触頭となった。後円融天皇の皇女の入室以後、光格天皇の皇女、普明浄院玉鑑永潤宮（倫宮）に至る約四一〇年間、すべて内親王が住持されたことが、御所ことばの伝承には好都合であった。

大聖寺二十四世、最後の宮門跡であられた倫宮は、文政三年五月一日誕生、文政十三年五月二十八日に薨ぜられている。満九歳のころ、仙洞御所におられた倫宮が、大聖寺の豊首座あてに出された絵奉書、たてぶみの口上書が残っている。これは、当時の御所の話しことばの一端を伝えて興味深い。そこには、「かいるやらしれんさかいでにそをもていや（帰るかもしれないから、そう思っていてください）」のような京都語が用いられており、「それはわるい事じや」（それは悪いことだ）のように、断定の助動詞に「じゃ」が使用されていることから、当時は現在の京都語の「や」でなかったことがわかる。

明治維新になってからは、内親王の入室はなくなったが、公家華族出身の女子が法灯を継ぐことになった。第二十五世、樋口慈綱さんは樋口宣康子爵の息女で、倫宮に小上臈として仕えた方である。第二十六世、石野慈栄さんは樋口さんの弟子で、石野基通子爵の息女である。われわれが昭和三十年代に何回となく調査に赴いて、多くの御所ことばを石野ゴゼン（御前）から聴取できたのは幸いであった。

尼門跡の生活は常に御所風である。そこでは、京都御

所のことばが受けつがれている。石野慈栄さんは、明治二十五年、六歳のとき樋口慈淵尼に弟子入りし、お次（つぎ）（家来）の一老、二老から、きびしいことばのしつけを受けた。「～いたします」というべきところを「いた」「ます」をつけないといって戒められ、げらげら笑い、くすくす笑いを人前でするものではないと叱られたりした。石野ゴゼンにあっては、御所ことばの使用は、幼少から自然に身についたものであった。人に礼をいうときは「かたじけのう」（昔は「お歓待（かんたい）」といった）といい、「失礼いたします」を「おゆるしあそばせ」という。また、「おそれいります」を頻用する。こうした御所ことばに精通されたゴゼンは故人となられた。お次の一老、故堀江要邦さん（明治二十三年生れ）は、十三歳でゴゼンに仕え、目上の人には「こうあそばせ」と「あそばせ」を用い、朝晩のあいさつに「ごきげんよう」というなど、家来の立場から御所ことばを熟知しておられた。ゴゼンにたいして、「ゴゼン、お居間にあらしゃいますか（いらっしゃいますか）」「ゴゼンにも、おひなって（起床して）いただかなくてはなりません」のように話されるのであった。

われわれは大聖寺のほか、宝鏡寺、曇華院、霊鑑寺、奈良の中宮寺の御所ことばを調査し、その結果を比較検討したが、石野ゴゼンと要邦さんの対話において、最も豊富な御所ことばの存続使用を観察する機会に恵まれた。尼門跡において、生活の様式全般が言語使用にどのように反映しているかを、われわれは調査することができたのである。『お湯殿の上の日記』などに記されている宮廷生活の一端も、この社会の実態を通して推察することができるように思われる。

八　尼門跡語について

御所風の生活を伝承するこの社会では高い矜持がある。尼門跡が一般庶民とは異なった存在であるとの意識は、次のような言語使用からも想像されるであろう。大聖寺では、自らの寺内のことを「こなた」とか「こなたがた」といい、京都の町家のことを何かにつけて「町方では」といって、いくらかへだたりの意識で話すことが多い。さらに尼僧たちは「おもうさん（父）」「おたたさん（母）」と御所ことばで呼ぶ社会、上流の公家仲間を含めて、自らの社会のことを「くるわ」と呼んで、御所風の言語生活を誇りとしている。

尼門跡においては、御前（ごぜん）、一老、二老のような身分が

あり、言語使用にもその差がある。大聖寺の一老、二老は自分の飯を「はん」というが、門主の御前のは「おばん」といって区別する。帯は自分のは「おび」、目上には「おもじ」を用いるというように身分差がある。「餅を網で焼いてください」という場合、一老は御前にたいしては、「ごぜん、おそれいりますが、おかちん（餅）をあもじ（網）で、おひどりあそばしていただかされ（焼いてくださいませ）」という。同じ場面で御前から一老へは、「要邦さん（一老の名）、おかちんをあもじで、ひどっておくれ」という。こうした主従関係による言語使用の差は、他家訪問のときのあいさつにもみられる。その辞去のあいさつに、御前が、「ごめんどう申しあげました」といえば、一老は、「ごめんどうさんをあそばしましてございます」というように話法の差を生じる。

京都御所の言語生活を伝承する尼門跡では特に敬語についての意識が発達している。語彙についてみると、お上（かみ）の口を「おみくち」といい、御前にたいして、その顔を「おみかお」と二重敬語でいう。首はお上のを「おみおくび」といい、一般に目上の人のを「おくび」という。足は、お上や宮様のは「おみやさん」、御前のは「おみや」、自分の足は「すそ」といい、区別して用いる。

人称代名詞の使用をみると、一人称代名詞は目上にたいして「わたくし」を用い、同輩や目下の者には「わたし」を使う。目上の人にたいして「わたしな」と「な」をそえていうと、いかにも押柄に聞えるという。二人称代名詞では、御前からお次には、「あなた」「あんた」というが、昔は「おまえさん」といった。一方、お次から御前へは「ごぜん」と呼ぶ。三人称では「あのひと」「このひと」を用い、「このかた」というのは、現代風の意識が感ぜられるという。

宮様以上とそれ以下の身分では敬語法に差がある。「おひるなる（起床する）」は、お上にたいしていい、「おひなる」は、宮様以下の目上に用いる。また、宮様には「ならしゃる」を用いたが、公家出身の御前には「ごわしゃる」というなどの差がある。尼門跡では、宮様を「宮さま」というより、「宮さん」と呼ぶ方が話しことばでは敬体とされている。

九　御所ことば使用の規範

大聖寺では、公私の区別が厳しく保たれている。大聖

寺への来客が「おみや（みやげ物）」を持参しても、一般の家庭にみられるように「有難う」ということはない。それは、客が御殿へ公的にみやげ物を持参したとの考えからである。また、客が辞去するときに、取次ぎの者は「またお出であそばせ」というようなこともいわない。御殿にたいする客に、私的なあいさつをすることは失礼であるとの意識からである。座敷を「おま（御間）」、居室を「いま（居間）」と区別し、宝鏡寺では、自分の居室の「たたみ」と、御殿の「おたたみ」を区別するのも、こうした意識のあらわれである。

古来の伝承に従って、御所ことばの使用にも規範意識がみられる。尼門跡では「有難うございます」と「ございます」をつけると鄙びた感じがするので、たんに「有難う」とだけいう。京都語の「おおきに」は用いない。身辺の物については、「お」の着脱によって自他の区別をはっきり示している。「お皿」「お茶碗」と、自分の使用する物にまで「お」をつけてはならない。自分の持物には「皿」「茶碗」といい、自他の区別を厳格にする。

雅俗の意識もある。わらびを「わら」という方が雅で、「おわら」と「お」をつけていうと俗な感じがする。「やきかべ（焼豆腐）」の雅にたいして「やきおかべ」と「お」を入れると俗な感じを持つという。

親疎の意識もある。御殿へ「おあがりなさい」を、「あがらしゃれな」は褻のことばだが、「あがらしゃりましな」の方が晴のことばである。また、誰は「たれ」で「だれ」と濁っていわない。曇華院は「どんけいん」と「け」を清んでいう。米は「およね」の方が「うちまき」よりも上品とする意識がある。

尼門跡では多くの京都御所のことばが現用されており、それらのいくつかの語については、尼僧たちの静態語源意識もうかがえる。大聖寺一老によると、団子を御所ことばで「いしいし」というのは、団子が固い石のようだからと説明する。餅を意味する「おかちん」の語源については歌賃説をとる。また、蕎麦を「そもじ」というのに、うどんを「うもじ」と何故いわないのかと疑問を懐く尼僧もあった。さらに、この社会では「おかしい」は「趣のある」意味で用いている。

尼門跡では諱のつけ方は古くから決められており、大聖寺と曇華院では、聖（宮様）、慈（上臈）、祖（お次）、宝鏡寺では、理（宮様）、周（上臈）、恵（お次）のように身分によってそれぞれの一字がついた。この社会の飼

猫の名も町方とはちがう。「おゆき、小太郎、小二郎、おその、太郎、こはぎ、桃太郎、福太郎、秋之助、みな子、いぬき」など、いずれも大聖寺の猫の名であった。

京都御所の風習を伝承した尼門跡であるから、言語使用にたいする意識も格別に御所的である。金銭のことを口にするのもはしたないとされる。源氏かるた、伊勢物語かるた、源氏すごろく、貝合せのような遊戯を心得ており、年中行事その他の古習俗を残していることは民俗学的にも貴重である。尼門跡は、京都御所のことばを再構成するために、現代の京都に残された最も重要な「言語島」である。

十　忌詞について

御所ことばの語彙は隠語的性格をもち、貴族的な婉曲語法にもとづくもののほか、忌詞がある。「血」を「あせ」と置き換えていうのは『延喜式』以来のことである。大聖寺では「魚が死ぬ」ことを「あがる」といい、「金魚があがった（死んだ）」などという。また、鳥獣の死ぬことは「落ちる」といい、「あの猫、落ちましてな」のようにいう。「剃る」を「たれる」というのも忌詞である。

いわゆる正月ことばとして、大聖寺では正月三ケ日は「ねずみ」という語を用いてはならない。「かのひと」と間接的に呼ぶ。これは、ねずみが大暴れすることを忌み、正月の吉日にこの語をいうのを避けるためである。また、正月に、昔は天狗のことを「もののものさん」と置き換えていった。もしも、うっかり「天狗」といってしまえば、祟りを恐れて打消さねばならなかった。「水、水、水」と三度唱えると災いが避けられたという。『お湯殿の上の日記』の中には、死をいうのに「こときる」とか「おことある」のような婉曲表現がみられる。病気に関する語として、発熱を「おぬる」、病気を「もうもう」「もうき」のような語を用いる。めでたいときに病気することを「かんらく（歓楽）」というのも忌詞である。衰日の忌詞としては、御所では「徳日」という。陰陽家で万事に忌み慎しむべしと決めた日のことである。要するに、御所ことば使用の社会は、「清」の生活の場であった。

（昭和五八年十月一日）

（関西外国語大学教授）